田村地区小学校長会広報

広報田村

令和６年度　　第２号
発 行 日　令和７年３月３日
発 行 人　会　長　佐久間敏晴
編集担当　広報部長　鹿俣　晶子

巻頭言　２０２４＆２０２５　from　MIHARU

三春町教育委員会教育長　添田　直彦

２０２４年、三春町で大きな注目を集め、多くの感動と勇気を届けてくれたのは、パリパラリンピックの車いすラグビー競技において、橋本勝也選手が金メダルを獲得したことでした。橋本選手は私たちに夢に向かって挑戦を続けることの大切さを改めて教えてくれました。

三春町では大会期間中、パブリックビューイングを行いました。深夜にも関わらず多くの町民の皆さんが駆けつけ、大きな声で日本チームを応援し、勝利の歓喜を味わいました。

そして、帰国後は凱旋パレードを行い、町をあげて橋本選手の健闘を讃えました。

橋本選手は、町民栄誉賞授与式の場で、こう語っておられました。

「車いすラグビーにチャレンジして人生が変わった。一歩を踏み出すことで、自分の可能性を広げられることを町民の皆さんにも伝えたい」

橋本選手は、小学校時代、体育の授業を見学して過ごしていましたが、ある時、担任の先生から掛けられた言葉、「できることからやってみよう」この一言をきっかけに、体を動かすことの楽しさや挑戦することの大切さを学んだそうです。

教師のさりげない一言、それが子どもを動かし、大きなの挑戦につながることは教育の大きな可能性といえるでしょう。それこそが未知なる可能性を切り拓く原動力となることを、橋本選手は自らの行動で示してくれました。

大切なことは、目の前の子どもたち一人一人が勇気を持って小さな一歩を踏み出すこと。例えそれが上手くいかなかったとしても、その経験がいずれ大きな成果を生みだすことつながることを橋本選手は教えてくれました。

２０２５年、三春町出身の登山家、田部井淳子さんが女性として初めてエベレスト登頂を果たされてから五十年を迎えます。

田部井さんは、「女性だけで海外遠征を」を合言葉に、偏見や障壁と闘いながら挑戦を続け、生涯で７６カ国の最高峰・最高地点の登頂を成功させ未知の世界を切り拓いてこられました。その背景には、様々な苦悩があったことが自伝にも残されています。その中で田部井さんが常々語っておられた言葉があります。

「あきらめず、一歩一歩登っていけば、自分の夢はかなえられます」

田部井さんは、東日本大震災の翌年から復興応援の一環として、被災した東北の高校生を招待して富士山に登ってもらおうというプロジェクトを始めました。

山頂に立ち、次なる東北を支える勇気と元気を富士山からもらって前へ進んでほしいと心から願っておられたのです。

今年は、田部井さんの一生を描いた映画
『てっぺんの向こうにあなたがいる』
が、吉永小百合主演、坂本順治監督で公開されることになっています。楽しみです。

“子どもが思い、子どもを想う”

小学校における日々の取組は、子どもたちの将来に向けて数多くの未来への種を蒔き続ける大きな営みです。

全ての学校で、子どもたち一人一人の個性や特性が尊重され、学校のいたるところで、子どもたちに対して、教師からの温かな承認・賞賛・奨励の言葉が飛び交い、いつも子どもたちと先生方の笑顔があふれている。そんな学校を夢見て、三春からのメッセージとします。

お人形様作戦

田村市立船引南小学校　鈴木　敏夫

１　はじめに

田村市の大きな課題として人口減少及び少子化問題がある。南地区も同様であり、年々児童生徒数が減少傾向にある。ある論文（※）によると、地域愛着度が高ければ地域志向度（地域に住みたい）は高く、地域愛着度が低ければ地域志向度も低い。次に、地域愛着度と学力の関係では、地域愛着度が高いほど、学力が低くなり、学力が高いほど地域愛着度が低くなる傾向にある。これら２つの内容は一般常識の範囲内で理解できる。しかし、意外だったのは、学力を上昇させれば転出する可能性は高くなるが、転出予定者の学力を更に上昇させれば、Ｕターンで戻ってくる可能性が高くなるという内容である。そして、そこには、地域愛着が必要条件となることも述べられている。

２　お人形様作戦について

上記の視点も踏まえ、今年度、本校教育活動の大きな柱として、「学力向上」と「地域愛着」の２つを掲げた。「地域愛着」については、「お人形様作戦」と称して、お人形様そのものを学習活動に活用したり、これまで続けてきた地域学習に関する内容を整理したりして、年間を通じて地域愛着を目指した教育活動に取り組んだ。田村市に現存するお人形様３体すべてが、この南地区にあるのも理由である。

３　取り組みの実際

(1)お人形様そのものを学習活動に活用

①各教科・領域に位置づけ

昨年度末の教育課程作成時に、各教科・領域担当者に活用アイディアを募集し、計画に位置づけた。キャラクターとして活用（算数科）、版画の題材にする（図工）、３つのお人形様までの道案内を作る（国語・外国語）、鬼ごっこ（体育）…を計画し実施した。

②運動会の種目として

運動会の種目の一つとして「お人形様運び」を実施した。地域の方々に、使わなくなった籠を組み合わせた型を作っていただき、児童が張り子・着色等で仕上げた紅白のお人形様を団体種目で活用した。恒例の種目になればと思っている。

③市の灯籠流し大会に出品

家庭から協力していただいたペットボトル約４００本を骨材にし児童・教職員・保護者・地域ボランテイアで高さ２ｍほどのお人形様灯籠を製作した。このお人形様灯籠には、児童一人一人がお人形様宛に書いた願い事短冊が貼られている。大会では、みごと大会会長賞をいただき、学校あげて感動を共有することができた。

④学習シールを作成・活用

お人形様（３体）のシールを作成し、自主学習ノート展や日頃の学習の称賛や学習意欲づけのために活用した。３体のお人形様をキャラクター化した名前も印刷されているので、児童にとっては魅力的であり学習意欲づけとして効果大だった。

(2)地域学習に関する内容の整理

①校外学習や講師招聘による体験

各教科等で計画する校外学習や講師招聘による体験学習は、事前・事後の学習を大事にした展開にした。特に地域の歴史、文化、観光、産業にふれる場合は､地域ボランティアに同行してもらい、分かりやすい解説も依頼した。

②食の体験

各学年の計画により地域ボランティアの指導を得ながら野菜やサツマイモ作りを行った｡秋には、お世話になった地域の方々を招待して収穫祭を行ったり、収穫したサツマイモで干し芋作り体験をしたりした。また、地域に学ぶ小中一貫体験教室では、地域の産品であるエゴマを使った調理実習を行った。食の体験により子どもたちの「胃袋をつかむ」活動ができた。

４　おわりに

これらの「地域愛着」を意図した学習活動は、小学校だからできる、小学生だからできる学びであると考える。これらを継続することで子どもたちが成人したとき、あるいはその後に南地区から離れていても、地域のよさを思い出したり、地域のために何か役に立とうとしたりする人がたくさん出てくることが願いである。

※地方都市における高校生の地域への愛着・Ｕターン意識・学力の３関係

（京都大学教育学部研究生　北山）

「３８年間を振り返って」

田村市立船引小学校　佐久間　敏晴

＜昭和６２年４月　棚倉町立高野小学校　教諭＞

新採用教員として３学年を担任しました。子供たちと出会い、「さあ、頑張ろう。」と意気込んでいた矢先、なんと風疹で数日間出勤停止となりました。しかし、諸先輩方に優しく指導いただき、無事初年度を乗り切りました。次年度は５学年担任、そのまま６学年に持ち上がり、気合を入れて陸上・水泳に励み、当時２４校あった東白川郡大会で入賞を果たし、子供たちと喜び合いました。

＜平成２年４月　都路村立大久保小学校　教諭＞

初異動、初複式学級（3年生7人、4年生9人）を経験しました。複式の授業を考える毎日でした。その年は５月「新築校舎引っ越し」、１０月「田村地区小教研理科授業公開 (注1)」、１１月「創立百周年記念式典」があり、なんという学校に来てしまったんだと思いました。しかし、素直で頑張り屋の子供たちとの学校生活は大変楽しく、２級僻地なのに４年間もいてしまいました。また、地区の方々が大変協力的で、公私にわたり大変お世話になりました。(注1) この頃は教科毎の学校指定で地区教員に授業公開をしていました。

＜平成６年４月　郡山市立大島小学校　教諭＞

全校生３０人の小規模校から全校生１０３５人の超大規模校への異動でした。体育館に全校生が並ぶとステージからは児童の頭しか見えませんでした。学年５学級で５－２、６－２と担任しました。３年目に初めて１学年担任を経験しました。その後、２学年、３学年を経験し、５年間在籍しました。学年で協議しながらの学年経営・学級経営は楽しく充実したものでした。

＜平成１１年４月　滝根町立滝根小学校　教諭＞

２管内３地区経験も終わり、再び田村地区に戻りました。５学年担任で、これが最後の学級担任でした。滝根町では２学期制が早くに検討され、教務主任として教頭先生と相談しながら導入に向けて進めることにやりがいを感じました。市町村合併となり、田村市でも２学期制が導入され、喜びを感じていました。最長８年間在籍しました。

＜平成１９年４月　田村市立船引小学校　教諭＞

３年間、研修主任、ＰＴＡ庶務を担当し、その後、教務主任となり、平成２３年３月１１日、あの東日本大震災を経験しました。担任が年休で補欠に入り、分科担当書写（幸い硬筆でした。）授業の終り頃でした。子供たち全員無事に避難させることができ、本当にほっとした覚えがあります。そして、日頃の避難訓練の大切さを改めて感じました。

＜平成２６年４月　伊達市立白根小学校　教頭＞

全校生２０名程の完全複式の小規模校でした。子供たちは素直で穏やかな２年間を過ごしました。しかし、この年から事務職員引き上げで、自分が事務処理をすることになりました。「ブーメラン帳票」「マスター」、何のことやらの連続。前任者、知り合いの事務職員、教育事務所主査に聞きまくり、同じ境遇の近隣の教頭先生と慰め、情報交換し合いながら、なんとか務めを果たすことができました。

＜平成２８年４月 小野町教育委員会 指導主事＞

４月１日に不安なまま着任し、町役場で辞令をいただき、やっと安心できました。学校を支える様々な教育行政を経験させていただき、本当に勉強になりました。ここでの経験がその後の職務に大いに役立ったことは言うまでもありません。

＜平成３１年４月　田村市立滝根小学校　校長＞

２度目の滝根町勤務。新築校舎でしたが、所々に見覚えのあるものがあり、懐かしみながら勤務しました。令和２年度からの滝根幼稚園併設に向けて、園長先生と様々な課題をクリアしながら、滝根町幼小連携教育の筋道をつけることができました。

＜令和３年４月　田村市立常葉小学校　校長＞

小中一貫教育を先進的に実施しており、完成したばかりの「スマイルロード」を通って、６年生が常葉中学校の６年教室で学習する姿は斬新でした。１階校長室から４階に上がり、スマイルロードを通って、中学校２階教室へ上がるのはよい運動でした。

＜令和５年４月　田村市立船引小学校　校長＞

２度目の勤務でした。今回は校舎も同じで、やはり自分が手掛けたものが所々に残っており、今も活用されていることに喜びを感じていました。教職員、保護者の理解を得て、初めての陸上競技場での運動会を実施することができました。県十指に入る大規模校において、日々起こる様々な問題・課題に対応しながら、充実した教育活動に努めました。

＜終わりに＞

３８年間を振り返ると、自分は「人」に恵まれたなという思いが強く残ります。これまでに出会った方々、たくさんお世話になった方々に対して、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

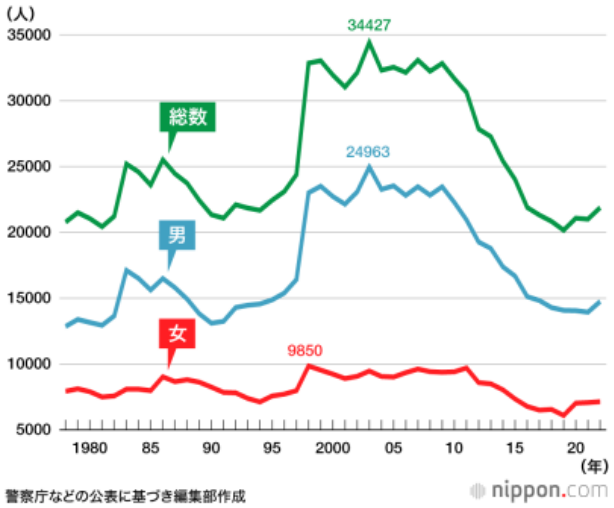
「ひなげしの花」と「寛容」

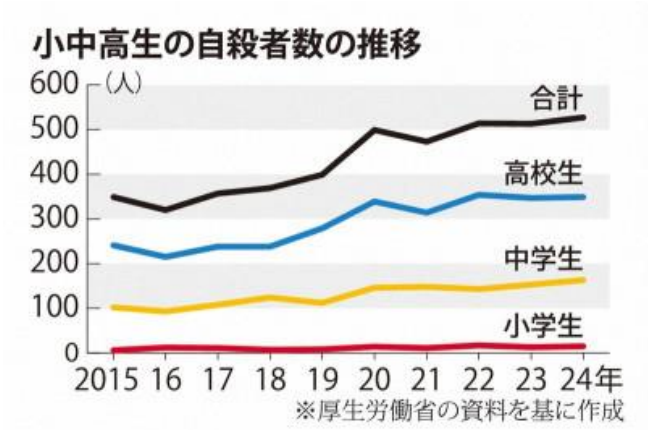
三春町立三春小学校　久保　知之

厚生労働省は１月２９日、２０２４年の自殺者数を公表しました。全体の自殺者数は２万２６８人、前年より１５６９人減ったものの交通事故による死亡者数２６６３人の約８倍という衝撃的な数です。さらに、ショックだったことは小中高生の自殺者が５２７人だったことです。統計を取り始めた年以降で過去最多です。

海外の主要国、Ｇ７各国と比較しても、日本の自殺死亡率は最も高く、１０～１９歳の死亡原因において自殺が１位になっているのは唯一日本だけです。センシティブな内容なので、大きく報道されることはありませんが、大変深刻な問題です。なぜ、日本は、こんなに生きづらい社会になってしまったのでしょうか。

自殺者数の推移





某国会議員は現在の日本をブログで「誹謗中傷大国」と称しました。誹謗中傷はよくないと言う一方で、未だに誹謗中傷はなくなりません。誹謗中傷する人は、自らが誹謗中傷しているという自覚がないのかもしれません。むしろ間違いを指摘して言動を正そうとしていると思っているのかもしれません。社会を生きていく上でルールやマナーはとても大切です。しかし、過剰な規範意識が、「ルールやマナーを守らない人」への激しい怒りや憎悪を生んでしまっているのではないでしょうか。社会を守ろうとする規範意識が、生きづらい社会の一因になっているとしたら、こんなに悲しいことはありません。

もともと日本は、間違いに対して徹底的に批判する厳しい国ではなかったはずです。１９７２年、今から５３年前、「ひなげしの花」という曲がヒットしました。当時、１７歳で香港から来日したアグネス・チャン氏のデビュー曲です。昭和世代なら、誰もが知っていると言っても過言ではない大ヒット曲です。この「ひなげしの花」は、曲の最高音から歌い出す印象的な曲ですが、特徴的なのは、その出だしの歌い方です。当時、日本語の意味をよく理解していなかったアグネス氏は「丘の上」を「おっかのうえ～♪」と歌ったのです。日本語の意味からすると決して正しい歌い方とは言えません。しかし、本人はそのことに気づかず何年も歌い続け、あるとき先輩歌手から「丘の上」だよと指摘されながらも、直すことができなかったそうです。今だったら、「間違った日本語だ」と誹謗中傷されてしまったかもしれません。しかし、当時は、来日したばかりという彼女の立場を尊重するとともに、独特の歌い方を彼女らしさとして多くの人が受け入れ認めたことが、ヒットにつながったのでしょう。

このような寛容さが、もしかすると生きづらい社会を変えるヒントになるかもしれません。「ひなげし」の花言葉は、「いたわり」「思いやり」です。相手をいたわり、思いやる子供たち、相手を認め、尊重し、支え合う子供たちの成長を切に願います。

御礼と感謝

三春町立御木沢小学校　今井　不二子

初任校の中学校では、家庭科教員として採用されました。当時は、週６日制で、朝・放課後は部活動があり、登下校指導や委員会活動、そしてお茶入れなども日課となっていました。部活動を終えて気がつくと１９時になっている毎日。土・日も部活動があり、練習試合や大会がある日は、早朝集合だったり終日だったりしていました。部活動が生徒指導においての大きな意義もあり、このような生活は、当たり前だと思っていました。その一方、一週間がとても短く感じられ、自由に使える自分の時間は、部活動が終わった日曜の午後だけになっていたので、常に悲しさを感じていました。他にも、疑問はありました。

他の校務では、生徒会経済委員会を担当し、朝、業間、昼休みは生徒と一緒に購買部での物品販売を行い、売上金を１４時までに銀行へ入金しなければならなく、自分の空き時間はいつも真っ先に売上金の勘定をしていました。さらに、定期的な在庫整理や業者への発注もあり、予想以上に時間もかかっていて、これも教員の仕事の一つなのかな、と思うこともありました。

校務分掌以外のお茶入れでも、職員全員の飲み物の好みを覚えなければなりません。朝、１０時、昼、１２時の１日４回を用務員さんと一緒に行いました。時々、手伝ってくださる先輩もいましたが、「お茶入れをやらなくてもいいよ」と言ってくださる方はいませんでした。翌年、初任の男性教員が転入しましたが、私の役目は変わりませんでした。ほとんどの方は、女性の仕事と思っていたようです。不思議に思い、ある時、大先輩に「なぜ、女性ばかりお茶入れをしなければならないのか」と尋ねてみました。「女の人がお茶を入れた方がおいしい」との大先輩の返答に、なぜか納得していました。

このように、授業以外の勤務時間内に教材研究を優先することもできなかったので、「教材研究が間に合わない。この先、自分はやっていけるのだろうか。」といつも不安でした。その後、家庭科が男女共修となったことから、従来の「女子だけの授業」に加えて、「男子だけの授業」の準備をして授業をすることになり、不安はより一層高まりました。

このような初任校での３年間でしたが、離任の日に学級や部活動の生徒たち、お世話になった先生方や地域の方々との別れを迎えたとき、これまでの自分のがんばりが認められたような気持ちになれました。このことは、その後の異動の度にも、感じることができ、着任で味わう新鮮な気持ちにつながりました。不安もリセットされて、またがんばってみようという気持ちにさせてくれました。

その後も、やりがいのある仕事をさせていただきました。その中でも、長期研修や行政で学べたこと、閉校・開校・小学校の統合に関わり、小中一貫校で、小・中学校の授業を担当したこと、教頭１年目の時、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故が起きたこと、新型コロナウィルス感染症が大流行したことは、多くのことを学ぶ機会となりました。

役職定年を迎えた今年度までの５年間、歴史と観光の城下町「三春町」で勤務させていただき、田村地区の校長先生には大変助けていただきました。特に、今年度は、７年前から開催が決まっていたものの、半ば諦めていた「第３９回北海道・東北地区小学校家庭科教育研究大会福島大会」を開催できたことは、奇跡に近いものでした。田村地区の小・中学校長先生方の温かいご協力をいただけたからこそ実現できました。ありがとうございました。

校長職の終末となる今、緊張や不安よりも無力感と安堵感を感じています。しかし、それ以上に、これまで多くのご指導・ご助言、ご支援をいただけたことへの感謝の気持ちばかりです。これまで大変お世話になりました三春町教育委員会教育長様、教育委員会の皆様、田村地区小学校長会長様、小中校長連絡会長様をはじめとしました地区内校長先生方のご理解と多大なるご協力に、衷心より感謝と御礼を申し上げます。

子ども・教職員・保護者・地域が共に創る
ウェルビーイング（幸せ感・充足感）の実現

田村市立常葉小学校　榊原　康夫

はじめに

「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」に関する本年度の文部科学大臣表彰に田村市の代表として常葉幼稚園・常葉小中学校運営協議会が選ばれた。そのこともあり、令和7年1月10日に行われた田村市学校運営協議会情報交換会でこれまでの取組について発表させていただく機会があった。改めてテーマである「子ども・教職員・保護者・地域が共に創るウェルビーイング（幸せ感・充足感）の実現」について整理してみたい。

１　ウェルビーイングとは

ウェルビーイングとは、1947年WHO 憲章の前文には健康（Health）が次のように定義されている。「健康とは、病気でないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。（日本 WHO 協会訳）」

また、2030 OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）は、教育の未来に向けての望ましい未来像を描いた、進化し続ける学習の枠組みであり、教育の幅広い目標を支えるとともに、私たちの望む未来(Future We Want)、つまり個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイングに向けた方向性を示している。

日本では第４期教育振興基本計画（R5）の中に、ウェルービイングとは、「身体的・ 精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。(P８)」と記述されている。

更に、「日本社会に根差したウェルビーイングの要素」 として、個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング【獲得的要素（自己肯定感、自己実現など)】と人とのつながり・ 関係性に基づくウェルビーイング【協調的要素（協働性、社会貢献意識など)】の両者を調和ある形で一体的に向上させていくことが重要とされている 。

（教育振興計画リーフレット：P2)

２　常葉中学校区のウェルビーイングとは

常葉中学校区のウェルビーイングに**（幸せ感・充足感）**と付けたのは目黒常葉中学校長からの提案である。**（幸せ感・充足感）**の中に獲得的要素（自己肯定感、自己実現など）と協調的要素（協働性、社会貢献意識など)を一体的に推進することは包含して考えることができる。

今年度の「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」の取組は本テーマを目指すということに一定の共通理解として常葉中学校区で合意形成を得ることはできたように思う。しかし、コロナ禍の活動 5 年を経て増田会長が発表の中で述べたように**「今年度がスタート地点」**ということは否めない。それでも学校運営協議会や熟議を通して少しずつ幼小中の共通の目標設定ができてきたと言える進歩があった。

３　来年度へ向けて

これまで述べたことを踏まえて常葉小の教育課程の重点は下記のように整理した。

- ○ 指導力向上のための授業公開（算数）の継続
- ○ 働き方（時短等）と働きがい（研修等）のバランスの取れた教育活動
- ○ 支援する者（ボランティア、地域)、支援される者（児童、教師）が共に幸せになれる協働活動
- ○ 子どもがより笑顔になる取組と発展的活動
- ○ 幼・小中一貫推進の更なる加速化
- ○ 「熟議」－「協働」－「マネジメント」のサイクルを生かした当事者意識の向上、教育活動の参画
- ○ 福島ならではの防災教育、震災学習（道徳)、安全教育の推進

おわりに

「子ども・教職員・保護者・地域」が共に創るウェルビーイング（幸せ感・充足感）は、包括的な研究的問い「学校を取り巻く子ども・保護者・教師等がどのような状態なら幸福といえるのか」から端を発している。そして昨年度末に常葉小の校長室で増田会長と「皆のウェルビーイングに焦点をあてていきましょう。」と話し合ったことが思い出される。

筆者は来年度からあくまで個人的、主体的な学びであるが明星大学通信制大学院で学ぶことが決まっている。「理論と実践の往還」をしながらこの大きなテーマに校長としてチャレンジしていきたい。

輝く子どもを育てる「中郷学校」

三春町立中郷小学校　宇都宮　弘

○はじめに

中郷小学校での勤務も２年目となりました。田村地区校長会の皆様には、いつもあたたかく接していただき、ご指導、ご助言をいただいておりますことに、心より感謝を申し上げます。

そして、皆様のお力をお借りしながら、伝統ある「中郷学校（中郷コミュニティスクール）」の名に恥じない教育活動を、責任をもって推進していくことができるよう、さらに精進して参ります。

○「滝ザクラを守る会」の伝統

「中郷学校」を代表する活動のひとつとして、「滝ザクラを守る会」の活動があります。特に今年度の「ＰＲ活動（４月）」は、三春町の滝桜の満開宣言が出された日に実施し、多くの観光客の皆様をおもてなしすることができました。コロナが収束し、多くの外国のお客様ともふれあうことができ、児童にとって、とても貴重な体験となりました。三春町には学校統合の動きもありますが、今後もこの「滝ザクラを守る会」の活動を大切に継承していけるように努力したいと思います。

中郷学校のよき伝統を後世に！

○「中郷学校」の素敵な風景

「中郷学校」は、広い校地をもち、さくら湖とも接しています。四季に応じて、たくさんの素敵な風景があります。すべてを紹介したいのですが、紙面には限りがありますので、その一部を紹介します。

はじめに、「ドウダンツツジのトンネル」です。大きなドウダンツツジは、秋になると真っ赤に紅葉し、とてもきれいです。その生け垣は、ジブリの世界につながるトンネルのようで、通る度に胸がわくわくします。

子どもたちからはトトロの森につながっていると…。

続いて「東屋から見る春田大橋」です。長い階段の先にある東屋から見上げる春田大橋は、いつもとは異なる趣があります。さくら湖の湖面にも近くなり、水鳥たちの飛び立つ羽音を聞いたり、風にそよぐ水面を近くで見たりすることができます。

最後は、「北の丘公園（校地内北側の丘）からの風景」です。高い位置から校地全景、さくら湖や遠くの山々を見渡せるので、天気のよいときは特に気持ちがよく、ずっと眺めていることができます。

○閉園となる中郷幼稚園との思い出

令和６年度末で「中郷学校」の一翼を担ってきた中郷幼稚園が閉園となります。とても寂しい気持ちでいっぱいです。今年度も、お神輿が小学校内を練り歩いたり、お楽しみ発表会の予行を低中学年の児童が幼稚園で鑑賞したりなどして交流を深め、楽しい思い出をたくさんつくることができました。

神輿が小学校に！

素敵な演技を鑑賞！

夏祭りでも共演！

○おわりに

「中郷学校」の子どもたち、保護者・地域の皆様のため、教職員と心をひとつにして、校長として初心を忘れることなく、今後も誠心誠意、職務に励んで参ります。田村地区校長会の皆様には、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

学校改革で“教師”を憧れの職業に！

三春町立沢石小学校　安生　昌弘

３月末をもって40年間の教師生活にピリオドを打つことにした。振り返ると、本当に幸せな教師人生だった。在籍した殆どの学校の同僚や保護者から「あの頃は〇〇校の黄金時代でした」と言われた。良き巡り合わせに感謝である。また、「伝説の教師」「スーパー･ティーチャー」などと言ってもらえた事は、世辞と知りつつも今後の人生を送るエネルギーを頂戴したように有り難く感じている。

教育界の諸問題は、公務員給与を抑制したことによる優秀な人材の公務員敬遠に起因すると思っている。教師の処遇改善である教職調整額の引き上げが期待外れとなった今、必要とされることは、教師を憧れの職業として復活させ、優秀な人材を教師志望に向かわせることである。つまり、「学校改革」で学校を変え、教師を憧れの存在にすることが、校長に求められていると思う。

校長職12年間のうち７年間の現場経験しかないが、最後の４年間は「学校改革」を極力進めたつもりである。校長諸氏にも是非「学校改革」を推進してほしいと願っている。「学校は内側からしか変われない」と教育行政５年間で痛感したので…。

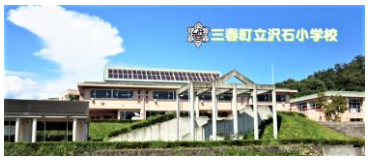
１．授業改革

協同的学びによる授業改革を全力で推進した。教師の指導観、教材観、児童観が変容し、一斉画一的指導から脱却できた。教室が居心地の良い学びの空間となり、学び続ける児童が育つ学校となった。学力や学習意欲が大きく向上したことは必然と感じられる。教師が協同的に授業づくりをするようになり、「初めて先生になって良かったと感じた」と話す学校にまでなった。「教える授業」よりも「学び合う授業」は相当に難しいが、ぜひ各校でチャレンジしてほしい。

２．学校行事再編

運動会を10月実施とし、学習発表会を２月の授業参観とした。秋季の運動会は、日本スポーツ振興センターが初めて公開した“学校等事故事例データベース”による「心臓系突然死が４、５月に多い」という統計を根拠にしている。学校の都合よりも子どもの命を優先する考え方であるが、結果的に、春季のゆとりを持った「学級づくり」や「授業づくり」が可能となった。

２月の授業参観は、１年間の学習成果の発表という意義に、時期も教室という場所も極めて有効である。保護者にも好評である上に、行事



の精選になり、効果的な働き方改革となった。

３．評価通年制

「指導と評価の一体化」が示されて５年経つが、通知表を従前通り学期ごとに発行していたので、相変わらず、教師は学期末評価のための記録に追われていた。評価が指導改善のために行われるよう、そして子どもを長期間の変容で評価できるよう、通知表を指導要録とリンクする内容にして学年末のみの発行とした。保護者からの問い合わせや苦情はゼロ、学期末時に教育相談の希望を募ったが、申込は１件も無かった。

４．教師の勤務適正化

朝、相当早く出勤する教師がいる。少ない教職員の状況で学校を開けることは危機管理上も問題だが、朝だけで超過勤務時間が嵩むことも問題である。子どもの登校時刻を始業の10分前までとし、教職員の出勤時刻も始業の10分前にして揃えた。安全と勤務適正化が両立した。

退勤時刻前後の職員室は多忙である。校舎の重層点検をしていた学校の教頭と教務による最終点検を廃止した。職員室にゆとりが生まれた上に、重層点検をしていた時の戸締まりミスが、最終点検廃止後は却って起こらなくなった。

教師による登下校の校外指導は、地域や自治体任用職員に完全移行した。教師は、校内での指導等に専念することができるようになった。

５．ＰＴＡ活動の見直し

専門委員会の再編を行い、教師に大きく頼っていた広報作成などを廃止した。発行したい保護者がチームを立ち上げる余地を残したが、現在のところ希望は無い。教師のＰＴＡ業務が減り、役員･会議･予算等の縮減にもなった。

他に些末なものは多くあるが、基本として教師が授業に関係する業務に注力できるよう、様々な学校改革を進めてきた。今後のさらなる改革は校長諸氏に委ねたい。しかし、「働き方改革」の名を借りた、子どもの学び育つ機会を奪う廃止や教師の指導力、授業力を低下させる改変は、厳に慎まなければならないと思う。最後に、学校でゆとりがあるのは校長のみである。震災時の表土入替後、校庭には石が頗る多い。２校の校庭から合計１t以上の石を取り除いた。子どものケガが減る上に、校長自身の健康面からもオススメである。